島根大学教育学部紀要（教育科学）第36巻　１頁～６頁　平成14年12月

中国における障害児教育の最近の諸問題Ⅳ

西　信高 *

Nobutaka Nishi*

Some Characteristic Problems in Special Education in Latest China Ⅳ

［キーワード：中国　少数民族　障害児　教育　福祉］

はじめに

2001年９月５日から11月４日までの２ヶ月間，文部科学省在外研究員（短期）として中国北京市に滞在した。受け入れ大学は中央民族大学，研究テーマは「障害児の教育課程及び指導法の分野における国際比較に関する研究」であった。中国の障害児教育については，これまでの数回の訪中等を通して研究を進めてきたが，多民族国家である中国においては少数民族という視点は不可欠という思いが強まった。そこで，今回の機会を通じて，まず民族問題，民族教育について知識を深めたいと考え，長年厚誼を受けている中央民族大学の胡振華教授に援助かた要請した。教授からは協力するとの懇切な回答を得，中央民族大学を足場とした在外研究が実現することとなった。同教授は回族であるが，これまで回族に関するさまざまな習慣を聞き，そして中国の少数民族に関することを折に触れて聞いていたが，この機会に少数民族に関わる実際の姿を見，そして触れることを意図したのである。切り口としては障害児教育を意識していたが，限られた在外研究の期間には直接障害児教育にまでは深めることは必ずしも満足のいくものではなかったが，しかしながら少数民族に関する基礎的な知識の集積と，そして教育の一端をのぞくという点では一定の成果を収めることができたと考えている。さらにまた，障害者や高齢者の福祉に関する問題でもこれまでに中国との研究交流を行ってきていたが，今回，別の老人ホームを複数参観する機会を得たことなど，今後の研究の進展に資する経験ができたことを喜んでいる。

これらの成果を反映させた研究は追々発表していく考えであるが，本稿では，在外研究の期間に経験したことの概要を報告する。そのなかで，お世話いただいた多くの方がたに対するお礼の気持ちも表したいと考える。

Ⅰ．中央民族大学

中央民族大学は，北京市の中心部の西北部に位置する。1951年に創設され，滞在した2001年はちょうど開学（建校）50周年にあたっていた。全国211の工程重点建設大学の一つとなっている。1939年に中国共産党が少数民族の幹部養成のために中央党学校に回族班を設置したが，その後41年に延安民族学院を開設した。49年の建国後は，少数民族の幹部養成と少数民族問題に関する諸問題の研究を進めるために，少数民族が多数居住する省や自治区に民族学院の開設を推進した。その中核をなすのが中央民族学院であったが，93年には大学に昇格し，それ以降，中央民族大学と称される。

大学は，以下の学院で構成されている。

民族学・社会学学院，中国少数民族語言文学学院，経済学院，法学院，芸術学院，チベット学研究院，理工学院，研究生院，成人教育学院，国際語言文化学院

学院のもとには，「系科」が配置され，たとえば，国際語言文化学院には以下のような系がある。

哲学・宗教学系，歴史系，中文系，教育系，外国語系，体育系，予科部

*島根大学教育学部障害児教育研究室

つまり，文化系の専門領域を主とした総合大学の役割を担っている。学生は全国から集まってきている。滞在初日の９月５日はちょうど新学年が始まった当初であり，構内には日常生活品などを売る臨時の露店が開かれるなど，非常な賑わいを見せていた。2001年入学生用の大学案内では学生数は８千と書かれているが，経営面の理由から定員より相当大幅に上回って入学させるとのことで，構内はむしろごった返しているという感じであった。学費は１年間５千元（１元ほぼ15円）であるが，芸術学院は例外で１万元となっている。ある程度富裕な家庭の子女でなければ，入学は困難といえる。

中国到着時，空港では外国語系講師の胡軍女史が迎えてくれた。大学では，語言文学学院の胡振華教授が出迎えてくれた。その後，教授の案内で国際交流処副処長の宋杰女史に会い，受け入れについてのお礼を述べるとともに今後２ヶ月にわたっての援助をお願いした。引き続いて，同教授に伴われて学内の諸施設を見て回り，また中央民族大学の学術雑誌「学報」編集部の徐亦亭氏など数人の関係者と会って，研究の概況などを教えられた。

用意されていた宿舎は，大学の西門のすぐ横にある「青年教工公寓楼」の三号楼323号室であった。２ＬＤＫのバストイレ付きであった。教職員のためのアパートといった施設で，家族で住んでいる人が多数であった。２ヶ月の宿舎費は6,972元であった。光熱水費その他一切が含まれている。もっとも，自炊はせず，電気の使用もシャワー用温水器程度に過ぎなかった。

学内に食堂は４つあるが，その他にファーストフード風テイクアウトの店もあり，また全国からさまざまな民族が参集しているため各地の専門料理を供している。中国の伝統的な料理に関しては安価であり，たとえば小さな蒸籠に肉饅頭が８つ入っているが，それで２元である。普通に中国人ふうの生活をしている限り，食に関しては出費は僅少ですむ。テイクアウトの店では，できたての熱いスープ混じりの料理でもナイロン袋に入れてくれる。学生は原則的に大学の宿舎に入る。構内にその宿舎があり，衣食住と勉学が同じ構内で行われる。一室は狭隘で，多段ベッドがしつらえられている。そのため，戸外で，つまり大学構内の至る所で思い思いに勉強している姿が見られる。声を出して熱心に英語を暗唱している学生を見ることは珍しくなかった。

写真1　中央民族大学グラウンドにて（右，胡振華教授）

写真2　日本語専攻学生に対する講話

９月の１ヶ月間は，「新生軍訓」といって，新入生が迷彩服を着て軍事訓練に励む。早朝から夕方まで，構内で行進練習を始めさまざまな訓練を受けていた。この訓練は，男子学生に限らず女子学生にも科せられる。

附属の図書館は，構内の一角にあるが，必ずしも蔵書は多いとは言えない印象を受けた。しかし，雑誌類は充実していた。各地の民族大学が発行している研究論集や，また中央民族大学が包含する多岐にわたる専門分野に応ずるかたちで各種の雑誌が備えられていた。館長の李徳

龍副教授は日本への留学経験があり，日本人の著作を翻訳中とのことであった。中国は人口が多く，可能な限り職を提供するために，不要とも思えるところにも人員を配置しているが，この図書館にも入り口に監視役の人がいてチェックしている。ということで，200元ほどの保証金を払い，「借閲証」というものを発行してもらい，それを入館の都度見せることとなった。

また，図書館とあわせてそれぞれの学院に付属する資料室も充実していた。ウイグル語言文化系資料室の康巴尓尼莎（Kanbarnisha）さんからは大変親切にウイグル族の生活と文化について教示を受けた。資料室には，壁一面の書棚に文献が並べられ，よく整理されていた。

このほかに，教員研究生閲覧室，目録室等があり，新聞や雑誌の類が保存され，充実していた。書籍は非常に古いものがかなりの量を占め，最近発行のものはごく少数であった。

かつて障害児研究室に留学していた胡勇さんには，通訳として，そして滞在期間中の生活全般にわたって多大な援助を受けた。滞在中中国語の会話力の向上を図りたいと考え，相手となって協力してくれる学生の紹介を依頼していたが，それに応えてくれたのもそのうちの一例である。舞踊系2000級本科の曹陽さんという女子学生であったが，まずは市内のバスの乗り方から始まり，郵便局の利用の仕方等々，当初の生活のＡＢＣ，そして同じく中国語の発音のＡＢＣも彼女から学んだ。すなわち，四是四，十是十，十四是十四，四十是四十，等々である。舞踊を専攻していたが，夜遅くまで授業が行われているようであった。中央民族大学の授業時間は，下記のようになっており，１月末から２月初旬，６月末～７月初旬が試験となっている。

10月～４月	３月～９月
８：00～９：50	
10：10～12：00	
昼食・休憩	
２：00～ ３：50	２：30開始
４：10～ ６：00	
７：00～ ９：00	

訪中後まだ日の浅い９月13日の夜に，第２回全国少数民族文芸会演開幕式文芸晩会があった。胡振華教授に招待されて出かけたが，会場は人民大会堂であった。全人大等大規模な会議が開かれる様子は日本でもテレビで放送されているが，確かに大会堂というにふさわしい外観と内装であった。彼女はそこに重要な役で出演していた。その他の演目も含め，中央民族大学芸術学院の学生の演技は非常にレベルが高く，感動的であった。そして同時に，国家として舞踊をはじめ少数民族の伝統文化を保護育成することに力を注いでいることを強く感じた。

10月初めであったが，彼女に案内されて国家図書館音楽庁での舟舟のコンサートを聴いた。胡勇さんが切符を手配してくれた。舟舟はダウン症の青年であるが，交響楽団を指揮するということで有名である。世界各地を回って「演奏」活動を展開している。当日受け取ったパンフには「燃焼の激情」「音楽奇才舟舟金色交響音楽会」と記されてあった。会場は満員に近く，人気のあることがうかがえた。しかしながら舟舟自身が登場したのは最後の10分かその程度であり，大部分は一般の演奏家の演目であった。そしてまた舟舟が話す場面はなかった。障害者が交響楽団を指揮するということで有名であり，たしかに指揮棒の動きは曲の流れと一致していたが，おそらく身振りをまねて覚えたに過ぎないと思わせるものであった。開演前には舟舟について書かれた著書の販売があった。どのような経緯でこのような能力を発揮するようになったのか知りたいと思い，購入を彼女に頼んだ。購入した本には本人がサインしていたが，購入にしてもサインにしても黒山の人だかりであった。列を作って順番に並ぶことはなく，我先にと買い，そして買った本を差し出すのであるが，彼女は心得たようにその長身を活かし，すばやく購入とサインを得た。自分にはできない芸当であり，たくましさに敬服せざるを得なかった。

人民大会堂での舞踊をみることができなかった学生のために中央民族大学の講堂であらためて披露があった。朝鮮族の白いドレスをつけて踊る清楚な姿に対して，盛んな拍手がおくられていた。

芸術学院の教員が以前島根県を訪問したことがあるということで，歓迎会を開いてくれることとなった。島根県の話も出たが，民族音楽談義に花が咲いた。西洋音楽と比べて例えば声楽の場合発声法は異なるのかと質問したところ，その違いを実演してくれた。そして，烏日娜先生たちが日本の歌とともに少数民族の歌も聴かせてくれたが，はじめて間近にプロが歌う伝統の歌を聴いて，心底震えるほどに感動した。

このように体験した歌や踊りについて，帰国後島根大学のそれぞれの専門教官にあるいは映像を交え，あるいは口頭で報告した。

滞在期間中に鄭玉順副校長からも歓迎の昼食会に招待された。同副校長は中国少数民族婦女研究センターの主任でもあり，また亜太経済文化発展研究所の副理事長でもある。話題は，主として女性の問題であり，今後日本

の女性問題研究者との交流を望むというものであった。中国では全国婦女連合会が組織されており，全国に30分会ある。民族大学もその一分会となっている。全国婦女連合会では２年に１回国際シンポを開催しているが，日本からの参加がないとのことであった。鄭副校長の話のなかでは出なかったが，日本国内の報道では新日本婦人の会がこの全国婦女連合会と接触していることが伝えられている。それで帰国後，新日本婦人の会の島根県組織に中国側の意向を伝えた。

また，９月末には北京市内の大学等研究機関に招かれている外国人研究者に敬意を表する催しが行われ，中央民族大学でも晩餐会が開かれた。筆者はそのような身分ではなかったが招待を受けた。大学近辺のレストランが会場であったが，アメリカ，ソ連，韓国等々十数名の外国人が参加し，歓談した。そのあと，中国歌劇舞劇院に案内され，民族舞踊を観た。国家外国専家局の招待によるものであった

胡振華教授を通じて中央民族大学を退官した郭兆林氏と知り合ったことも有益であった。何度か行動をともにしたが，盧溝橋，中国人民抗日戦争記念館へも行った。前者は日中戦争の発端となったところであるが，橋の欄干の上部にはさまざまな獅子が彫刻されている。あちらの岸から日本軍が北京市内に進入したという話を聞いたときには，昔授業で学んだ歴史が急に現実味を帯びて迫ってきたように感じた。そのすぐ近隣にある後者には，その戦争のなかで日本軍が行った数々の蛮行が写真やパネルで示されていた。それらを見ると誰しも戦争は絶対にあってはならないと思わずにはいられないであろう。この記念館は非常に立派な建物であった。郭氏は一人住まいで，夕食にも招待されたが，料理の腕前も一流であった。

中央民族大学では，胡軍講師から依頼され，日本の大学，そしてまた大学生の生活について日本語専攻学生を対象に講話を行った。非常に会話力に優れていることに驚き，また熱心に質問してきたことにも驚いた。日本では英語教育のありようについて，とくに会話力に関わって批判的な議論がしばしばなされるが，たしかに，なぜこのように日本語の会話力に優れているのか，研究する必要を感じた。

Ⅱ．中国人民大学

中国人民大学は，胡振華教授のお嬢さんである胡霞女史が経済学の副教授として活躍している大学である。正門を入ると，正面に鄧小平のことばとして有名な「実事求是」の文字が刻まれた大きな石が目に飛び込んでくる。

やはり中国語のチューターとして学生の紹介を胡霞副教授に依頼していたが，大学院生の李臻云が協力してくれることとなった。ほぼ週に一度の頻度で会い，日本の政治や経済の状況をはじめさまざまな話題で会話した。また，北京市内でもっとも大きな書店である北京図書大厦にも案内してもらった。帰国直前には蒙古族風情歌舞晩会の切符をとってもらって一緒に観た。非常に熱心でまじめな学生であった。

中国人民大学でも胡霞副教授の関係する講座の院生を対象として，日本の状況に関しての講話を依頼された。話を終えたあとの質問では，日本の政治経済に関する鋭い質問が出された。

講話終了後，経済学院常務副院長の高徳歩教授，経済学院経済発展教研室主任于同申教授らから食事の招待を受け，歓談した。

Ⅲ．天津中日学術交流センター

滞在中に胡振華教授のもとに，天津中日学術交流センターの危穎涵副主任から，日本事情に詳しい教授に交流について相談があったという。それではちょうど日本から来ている者がいるので紹介するということになり，それで危副主任に会うこととなった。そして，後日の10月９日，天津市訪問が実現した。

天津までは電車に乗ったが，車窓からの眺めはほとんどが畑地で，広々として，大陸を実感させる風景が続いた。天津駅では，危副主任と同センターの弁公室主任曲暁陽氏が出迎えてくれ，２日間の全日程を通じ実に懇切な接待を受けることとなった。

天津市内の回族向けレストランで昼食のあと，天津市民族職専（職業専門学校）を訪問した。校舎の入り口には大きく小生を歓迎すると書いた横断幕がはられていた。聞いたところ，時儒山校長自らの筆になるものとのことであった。高級政工師の肩書きを持つ時校長は，中国職教学会少数民族委員会常務理事，全国民族中学教育協会常務理事でもある。建物の屋上にはイスラム寺院を思わせるモスクがあり，内部は広々としてやはりイスラム寺院を思わせる雰囲気があった。回族は豚肉を食べない習慣があるが，回族に配慮した料理が供される食堂もあった。

学校を辞して，次には夕陽紅回民養老院を参観した。町中の雑踏の中にあったが相当の年数を経た古い建物であった。劉院長の案内で施設内を見て回った。ほとんど寄付によって運営しているという話であった。慈善事業のイメージを強く受けた。

その日の夕刻は，天津社会科学院秘書長の帳健研究員の招きで夕食会が開かれた。テレビで見かける遠いところから長い管でお茶を注ぐパフォーマンスが印象的であった。中日学術交流センターは設立されてからまだ日が浅いが，今後中日間の研究交流に力を入れたいのでと，協力を依頼された。障害児教育の関係では天津には専門の研究者はいないとのことで，橋渡し役としては必ずしも適任ではないが，努力したいと答えた。

その夜は，天津市の「友誼賓館」に宿泊した。北京にも友誼賓館があるが，北京市の他にも友誼賓館のあることを初めて知った。旧ソ連との関係が良好であった頃を思えば各地に存在するのも頷けるが，天津の友誼賓館も快適であった。

翌朝，曲主任ができたての「天津甘栗」だといいながら，まさに天津甘栗をほおばることとなった。列に並んで買い求めたとのことで，深く感謝した。この友誼賓館も朝食はバイキングであったが，おにぎりを始め日本食が豊富に用意されていた。

二日目の午前中は，まず天津市聾唖学校を訪問した。校長は出張中とかで，郭自強副校長らの出迎えを受けた。説明によると，1928年創立で，学校の規模は小さく，30名の在籍とのことであった。８歳から15歳までの重複障害を有しない者を対象としていた。そのあと校内を参観し，授業も観たが，日本の手話を試してみると，一部が通じた。聴覚障害の教育や手話に関しても研究をすすめなければと，新しい刺激を受けることとなった。指導法など，参観と説明の範囲では，全般的に日本の状況と大差はないと感じた。

ここでも日本のろう学校との交流をぜひ，と強く要請された。帰国後島根県立ろう学校の先生にその旨を伝えたが，まだ具体化はしていない。

昼食は駅近くのイスラム料理店に案内された。庶民的な店であった。天津訪問を通じて，老人ホームの近辺もそうであったが，具体的に一般庶民の生活をかいま見る機会があったことは，非常に有益であった。

Ⅳ．懐柔県障害者連合会

胡軍講師の車で送迎してもらった。胡振華教授夫人も同行した。彭明啓氏，林祥泰氏（副理事長）はすでに日本で会っていたが，久しぶりの再会となった。彭明啓理事長は顧問となり，代わりに趙明亮氏が理事長に就任していた。以前訪問したときは青春路に建物があったが，最近移転したとのこと。以前と比較して広くなり，快適ということであった。建物内部を見て回り，そして展開されている事業の概要を聞いた。

そのあと，近隣に位置している知的障害児を対象とした養護学校を参観した。「懐柔県培智学校」という名称で，校門を入ってすぐのところに「向残疾児童献愛心」と書いた碑があった。ダウン症児，自閉的な子どももいたが，全体的に障害は軽かった。音楽や算数，そして手芸などの授業を参観した。１クラス５～６人までの少人数であった。

学校を辞して，再び障害者連合会の人たちにより，昼食会に案内された。

帰国後まもなく趙理事長の事故死の悲報に接した。強固な意志で手際よく事案を解決する人物という印象を受けたが，今後の活躍が期待されただけに惜しまれる。また，日本での再会を約して別れたが，それも果たすことができず，悔やまれる。冥福を祈りたい。

Ⅴ．北京市内の回族関連機関

１．北京市回民学校

于洪武校長の出迎えを受けた。于校長は高級教師であり，政協北京市委員会委員，中国民族学学会回族学会常務理事，全国民族中学教育協会副理事長等の肩書きを持つ人であった。学校は宣武区内の回族が多く住む牛街に近いところに位置していた。非常に立派な建物であり，敷地も広かった。図書室や食堂そして寄宿舎が充実しており，その他快適な勉学生活が送れるようにと配慮されていた。1949年の開校で歴史もあり，学校の沿革や歴史に関する書籍も何冊か刊行されてお

写真3　北京市懐柔県障害者連合会にて
（左から，胡振華教授，筆者，趙理事長，林副理事長）

り，研究活動も盛んにとりくまれていることがうかがわれた。

２．イスラム教会

同様に宣武区にあるイスラム教会を訪問した。マスメディアを通じてイスラム教会はなじみがあるが，初めてその内部に入り，また同じく初めて礼拝する人の姿を見た。馬忠杰氏から，全国のイスラム教徒の人口，生活，教育等，全般にわたって詳細な説明を受けた。氏は，中国イスラム教教会の副会長であり，また，雑誌「中国穆斯林」の主編でもある。訪問のあと，若手の職員二人とともに近くのレストランで夕食をとった。

この訪問は北京市回民学校と同じ日であったが，全日胡振華教授に案内と通訳をいただいた。

Ⅵ．老人ホーム

「陽台山老年公寓」を参観した。海淀区民政局の馬純礼副局長の配慮により，実現した。局長ご夫妻，胡教授ご夫妻とともに行動した。徐忠堂院長の説明と案内を受けた。

この老人ホームは，非常に近代的な建物で諸設備も整えられ，立派なものであった。海淀区政府が支出して建設された，主として共産党の老幹部用老人ホームである。300名収容可能となっている。専任の医師も配置され，また民族の習慣や入居者個々の状況に配慮した「分餐制」が取り入れられるなど，さまざまな配慮がなされている。昼食をごちそうになったが，日本人の来客ということで川魚の刺身が用意され，しかも現地の材料のみで醤油とわさびに似せたドレッシングが添えられていた。味はまったく日本のものと変わりがなかった。料理人が苦労して客を喜ばせようとするその姿勢は，おそらくこの老人ホームの運営全体にわたって貫かれているであろうと感じた。

Ⅶ．その他の訪問先

１．北京中華民族園

胡教授の好意により，教授ご夫妻とともに参観することができた。広大な敷地に，中国少数民族の生活や習慣を実地に理解するには好適な建物や展示が配置されている。民族衣装や特産も展示されており，短時間で一通り各民族の民俗を知るうえでは格好の場所である。同じ中国の国民ではあるが，それぞれの民族によって独自の文化を持っており，その独自性と共通性を調和的に融合させて行政をすすめていくことの困難性をも感じさせた。

２．国家図書館

中央民族大学に隣接するといえるところに位置している。読者カードを発行してもらい，何度か足を運んだ。近辺には公園もあり，環境に恵まれている。障害児教育関係については，中国人の著作はほとんど皆無に等しいが，日本語文献は相当の蔵書数であり，最近発行のものも少なくない。貨幣価値からすると日本の書籍の購入には多額の費用が必要となることを考えあわせれば，さすがに国家図書館であることを感じさせる。

３．教師節

参観ではないが，滞在期間中に教師節を迎えた。テレビ等で，盛んにとりあげられていた。

教師節は，教師への尊敬を促す日，とされる。現代中国事典（天児慧，1999.5）によると，1931年，北京と上海の教育界の提唱によって６月６日にさだめられ，双六節と呼ばれ親しまれていたが，43年には国民政府が8月27日の孔子生誕記念日に変更したため，前者は共産党系が，後者は国民党系がそれぞれを主張することになった。建国後はメーデーを教師の日にも当てていたため，長らく教師の日としては有名無実であった。そこで，85年1月義務教育施行を目前にして，ともすれば軽視されがちであった教職への理解を喚起し，教師の社会的地位の向上，教師への尊敬を呼びかけるべく，９月10日を教師の日とすることを決定した。この日は，多くの行事とともに，教師への様々な表彰もあわせて行われる。

93年10月には教師法が成立し，教師の資格や任用，養成，待遇，職責などが法律で規定された。膨大な数に上る教職を規格化することによって，その地位の安定と向上図るという点で意義は大きいといえる。

４．国家民族事務委員会

国家民族事務委員会国際司の塔瓦庫勒司長から夕食の招きがあった。同司長は，中国少数民族対外交流協会会長でもあり，少数民族の国際交流に関して高い地位を占めている。初対面ではなかったが，以前と同様豪放闊達な語り口で，現下の情勢等聞くことができた。

謝　辞

この度の在外研究について，胡振華教授のご家族に厚くお礼申し上げたい。まさに物心両面に渡りご援助いただいた。それに報いるために，成果をまとめるとともに，一層両国の研究交流が緊密になるよう，ささやかながら尽力したいと考えている。

参考文献

天児慧他；現代中国事典，1999.５，岩波書店，p.196